

入選

テーマ：未来のための今を生きる
「自然な支え合い」

栃木県立盲学校高等部2年 八染まどか

意識しすぎること、行きすぎた行動になってしまふ。知らないから、求めていることに気づかない。今の社会は、障がい者への手助けについて正しく理解している人や、知っている人が少ないように思う。障がい者だと意識しすぎて、求めていないことまで手を出してしまふ。手助けを求めているのもうまく伝わらない。今の世間の考え方は、障がい者を見かけたら声をかけて手助けをする、というもののように思うが、実際に障がい者が求めているのはそういうことではない。

中学生のころの話になる。私は弱視のため、球技系の試合をするときは、見学が多かった。クラスメイトにゲームの状況を聞いても、見えないことを励ます言葉しか返ってこなかった。私はゲームの状況が知りたかっただけに、その意図は伝わらなかった。しかし、ある生徒が私の意図を察して、ゲームの状況解説をしてくれた。その生徒に対する周囲の反応は冷たかったが、私は本当にうれしかった。こういう人が増えるといいなと私は思っている。

手助けを必要としている人たちが何を求めているかに気づき、理解して、その上で手助けをする。そんなことが自然に行われるような社会が来ることを私は期待したい。いや、むしろ障がいがあるかないかは関係なく、互いが同じ人間として助け合えるような「共存社会」となっていきたいと思う。なぜなら、困っている人を助けることは自然にできる。それならば、その困っている人が障がいをもっていても、同じように助けることはできるのではないかと考えるからである。

そうした社会になるために私は、まず自分が手助けしてほしいことを相手に明確に伝えるようにしている。そしてさらに、自分が手助けが必要ないときに手助けを申し出てきた人がいるときは、勇気を出して丁寧に断るようになっている。自分でできそうなことまで助けてもら

うと自分が成長できない。だから自分のできることは自分でやる。しかし、せっかく手伝いを申し出てくれた人に対してただ断るのでは、声をかけてくれた人に申し訳ない気持ちもある。だから、相手に対して敬意を払い、丁寧に優しく、かつはっきりと断るよう心がけようと思う。

それから周囲の人には、障がいをもつ人についてもっとよく知ってほしいと思う。機会があれば多くの障がい者と接してほしいのだ。一人では難しくても、家族や友人と一緒に障がい者と話し、日ごろどんなことを考えているのか。どんな手助けがうれしいのかを直接聞くとともに、障がいがあっても何ら変わりのない同じ人間だということを知ってほしいのだ。

私と同じ視覚障がいの人なら、白杖を持ち上げていたら、何らかの手助けが必要だというサインである、などというような知識も身につけてもらえればいいと思う。そしてそのことを、友人や知人といった別の誰かに伝えていってほしい。そうすることで、少しずつ障がいに対する過剰な意識も和らいでいくのではないかと私は考えている。

逆に障がいをもつ人も、手助けを待つことや助けてもらえることが当たり前だと思わず、手助けが必要なきは自ら発信していく必要がある。自分が今してほしいことは何か、相手に対して配慮することは何かを考え、それを互いに伝え合う必要があると思う。

このようなやりとりを続けることで、健常者と障がい者が自然な支え合いができるようになり、将来的には障がい者、健常者という分け方も解消していくことを私は目指している。これは、長い時間をかけて実現できることなのではないかと思う。いつ実現するかも分からない。でも私は、みんなが少しずつ意識を変え、行動に移していけば、きっと実現すると信じている。だから私は、今の自分にできる精一杯のことを行い、夢の実現に一步でも近づけるように、日々取り組んでいこうと強く思っている。